# 二人の主人公：アレクシスとユスタッシュ

小栗栖　　等

# Deux Héros: Alexis et Eustache

Hitoshi OGURISU

和歌山大学

教育学部紀要

—人文科学—

第47集　1997年2月

和歌山大学教育学部発行

和歌山大学教育学部紀要　人文科学　第47集（1997）

# 二人の主人公：ユスタッシュとアレクシス

小栗栖　　等

# Deux Héros: Alexis et Eustache

Ogurisu Hitoshi

## 第一節　問題提起

『聖アレクシス伝』と『聖ユスタッシュ伝』は，ともに10世紀のラテン語原本をもとに創出され，中世のフランスで大きな成功を収めた。しかし，両作品の歴史には興味深い相違が存在する。『アレクシス』の方は，11世紀に作品が成立し，12世紀には既に改変を被り始め，13世紀の３写本のうち原形をよく留めているのは１つだけである。それに対し，『ユスタッシュ』の方には13世紀においてなお，ラテン語原本を極めて忠実に訳した２種の写本が成立している。１つは韻文訳であり他方は散文訳である。ちなみに，この「韻文版」と「散文版」が“先行する忠実な俗語訳”に共通の源泉を持つ可能性は全くない。それは次の事実による。すなわち，１）原本を完全に直訳した部分がしばしば異なった箇所に見られる。２）「散文版」は原本の矛盾する箇所をそのまま訳しているのに対し，「韻文版」は矛盾を回避している。３）誤訳や変更の箇所が異なる。つまり，共通の祖本に基づく場合の共通性が両版には見られないのである[1]。また，１）に指摘した“原本を直訳した部分”というのはかなりの数にのぼる。それゆえ，両版がともにラテン語本に直接基づくのは間違いない。だとすれば，両版が13世紀の新訳だということもほぼ確実である。フランス文学で散文が用いられるのは，13世紀からであるし，「韻文版」に見られるような頻度で句送り（rejet）の技法が用いられるのも，12世紀末頃以降のことだからである[2]。つまり，『ユスタッシュ』には独立した二つの「先祖返り」が見られることになる。一方，『アレクシス』はすでに見た通り改変を受け続けていたのである。

さて，上にのべたような違いには様々な原因があり得よう。本論では，そうした原因の１つとして，主人公の違いに着目してみることにする。というのも，アレクシスは12世紀前半頃以前に人気を博した英雄像と共通する性格をもっているように思われるし，一方，ユスタッシュは12世紀末以降に流行した主人公像との親和性を備えているように思われるからである。以下では，まず主人公の相違を明らかにする形で作品を要約し，ついでそうした相違の要点をまとめ，最後にそれらを他の作品の主人公に見られる特徴とつきあわせてみることにする。ところで，我々が検

討を加えるのはあくまで俗語作品である[3]。これに対しては，ラテン語版を検討するべきだという批判があるかも知れない。そして，原本の検討が我々の考察に裨益することは間違いない。しかし，今回考察するのはあくまでも物語の筋立てであり，その点に関して俗語作品はラテン語原本に忠実である。それに，当面我々の興味を惹いているのは，アレクシスとユスタッシュの客観的な相違ではなく，両主人公の受容（réception）の相違である。俗語作品を創出したり，享受したりする人々が，どういう人物像に魅力を感じたかが大事なのである。それゆえ，さらなる考察を念頭に置きつつも，まずは俗語作品の検討によって問題に着手してみることは許されよう。

## 第二節　物語の粗筋

『アレクシス』：長らく子宝に恵まれなかったローマのウーフェミアンは，神への祈りにより子どもを得た。そして，その息子が成人すると，自分の跡継ぎとするため結婚させることにする。だが，息子のアレクシスは神に全身全霊を捧げていたため，結婚を受け入れることができない。彼は新婚初夜の晩に新妻を残して家を出てしまった。そして船に乗り込み，アルシスの街にたどり着くと，貧者に全財産を配ってしまい，喜捨で身を養うようになる。両親が送り出した使者達がやってきたが，変わり果てたアレクシスを見分けなかった。17年がたって，街に奇跡が起こる。彫像がアレクシスを「神の僕」と称び讃えたのだ。街に噂が広まると，彼は船に乗り込んだ。ところが，船は風向きのためにローマに到着してしまった。しかし，変わり果てた自分を両親も認めることはあるまいと，船を降りる。はたして，父親は彼を自分の息子とは気付かず，乞われるままに館の階段の下に寝床を与え，従者を１人つけてやる。再び17年の月日が流れ，貧者の生活は34年に達した。病に伏したアレクシスは自らの素性を羊皮紙にしたため，死に備える。そして，いよいよ死が避けられないものとなったとき，ローマ市中に天の声が響きわたった。アレクシスを探し出して祈りを捧げなければ，街は崩れ落ちるであろう。そこで，法王と２人の皇帝は苦労して聖人を捜し当てるが，彼はすでに死んでいた。法王は祈りを捧げて，死者の握っていた羊皮紙を取り出す。聖人の素性が明らかになると，彼の両親も妻も大いに嘆き悲しまずにはおれなかった。やがて，人々が集まって来て，聖人の亡骸を取り囲んでしまう。諸侯たちは金をばらまいて貧者を散らそうとするが，彼らは見向きもしない。奇跡が起こり，やってきた病人達はすっかり回復して街を去る。７日後アレクシスの亡骸は埋葬された。後に彼の妻も天国にのぼり，２人は寄り添って天国に住まうことになる。

『ユスタッシュ』：まだ，異教信仰が盛んな時代のローマにプラキドゥスという将軍があった。彼はキリスト教徒ではなかったが，弱者への喜捨やいたわりの心を欠かしたことはなかった。ある日の鹿狩りの際，将軍は大鹿を追いかけて１人深い山奥に入り込んでしまった。鹿は言葉を話し出し，やがて角の間にイエスの姿が現れた。改宗を促す顕現であった。彼は山を下りると妻と２人の息子と共に洗礼を受け，彼自身はユスタッシュの洗礼名を受ける。山に引き返してきたユ

スタッシュの前に再び姿を現したイエスは，試練に耐えて悪魔との闘いに勝利を収めよと言い渡す。そして悪魔の誘惑が始まった。家畜も召使も皆疫病で死んでしまい，残った財産も夜盗に奪われた。喜捨で身を養わねばならなくなった一家は，人目を避け海を渡ることにする。ところが，ユスタッシュの美しい妻に目をつけた蛮族の船長は，船賃代わりに彼女を奪い取ってしまった。泣く泣く船を下りたユスタッシュにさらなる不幸が襲いかかる。川を渡る際に，相続いて２人の息子を獅子と狼に奪われてしまったのである。息子達は偶然同じ村の農夫と羊飼いに救い出されたが，それを知らないユスタッシュは大いに嘆く。やがて，彼はとある村にたどり着き，そこで畑の番人をして身を養うようになる。さて，月日はながれ，ローマに蛮族が進入するようになった。皇帝は将軍の行方を捜させる。かつての友たちがユスタッシュの住む村にもやってきた。彼はしらを切って酒を振る舞うが，２人は彼の正体を見抜いた。彼は友人たちの懇願を受け入れてローマに引き返し将軍に返り咲く。蛮族との闘いは上首尾に進み，ローマ軍はユスタッシュの妻の住む国にまでやってきた。彼女は船長の病死によって貞節を守ることができ，１人で果樹園の中に居を構えていた。妻は将軍のもとに出向き，ローマに連れ帰ってくれと頼んだが，その相手が夫だと知って大いに驚くことになった。再会はそれに留まらなかった。将軍の側近の２人がかつて生き別れた息子たちだということも明らかになったのである。全軍は喜びに沸き返って，ローマへと引き返し始めた。ところが，その間に皇帝の代替わりが起こっていたのだった。新皇帝はユスタッシュの信仰を許さない。一家は獅子の檻に閉じこめられたが，獅子は彼らに危害を加えようとはしなかった。それを見ると皇帝は，銅製の牛を真っ赤になるまで火にかけ，そこに一家を放り込むことにした。ユスタッシュは殉教を前にして演説を行うと，牛の中に身を投じた。後に牛が開かれると，聖人たちの亡骸は生前そのままの美しさであった。皇帝は恐れをなして宮殿に閉じこもり，人々は口々にキリストの偉大さを讃えた。後に，キリスト教の弾圧が終わりを告げると，殉教の地にはユスタッシュ一家の亡骸が葬られ，寺院が建立された。

## 第三節　『ユスタッシュ』と『アレクシス』の相違点

両作品を比べてまず目につくのは，『アレクシス』に比べて『ユスタッシュ』では，意識的なものにせよ無意識的なものにせよ，家族に対する愛情が非常に大きな比重をもつということである。なるほど，アレクシスの殉教後，両親はひどく嘆いてはいる。だが，父親の嘆きに代表されるように，彼らは自分の跡継ぎが失われたことを嘆いているのである。

「おお息子よ，私の財産は誰のものになってしまうのか。私の持つ幾つもの広大な領土，ローマの街の大きな宮殿は。（vv.401－403）」

しかも，彼ら自身もキリスト教徒なのに，息子が天上の国に永遠の住処を得たことには全く関心がない。彼らの長々とした嘆きは現世的な視点からのみ展開されている。一方，少なくとも物

語の中では，妻の嘆きはごく手短である。その点で，彼女が死後夫とともに天国に住まうことになるのに対し，両親については全く言及が見られない，というのは示唆的である。とはいえ，その妻にしても，出家の邪魔をしなかったというだけのことで，本当にアレクシスの宗教的姿勢を理解していたかは疑問である。彼女はアレクシスの選択を積極的に支持したわけではない。つまるところ，アレクシスとその家族の間には，精神的な一体感はほとんど感じられない。

一方，ユスタッシュの家族は完全な一体感を持っている。異教の時代にあって，妻はユスタッシュの改宗を引き留めないばかりか，共に洗礼を受けてしまう。息子たちも，長らく両親とは接触がなかったにも拘らず，両親と殉教の運命を共にして不平のひとつもこぼさないのである。

こうした家族愛の大きさの違いは無意識の選択にも影響を与えずにはおかない。アレクシスの父親は我が家の階段の下に住むのが自分の息子だとは全く気づかない。他方，ユスタッシュは，もはや幼年期の面影も薄い成人した息子たちを，何となくとはいえ見分けている。

「将軍は二人の若者が肉体的にも精神的にも気高く立派な人間なのを見て取って，彼らを可愛がるようになり，自分と食卓を共にするように命じた。（XXVI.13－15）」（vv.1467－1469）[4]

もし，彼が息子たちを手元に置いていなかったら，と考えれば，この選択が大きな意味を持つことは容易に理解される。というのも，息子たちとの再会が可能になったのは，妻がそれとは知らずに彼らをもてなし，彼らの話を聞いたからである。ところで，ユスタッシュの陣屋はたまたま彼女の家の果樹園に置かれ，息子たちは最寄りの家に迎えられたのである。それゆえ，息子たちが将軍（ユスタッシュ）の側近でなかったとしたら，家族の再会はなかったことになる。

とはいえそれ以前から，アレクシスとユスタッシュは全く異なった態度を家族に対してとっている。前者は出家する時点で両親も妻も自分と運命を共にはすまいと考えている。だからこそ一人で出家したのである。一方，ユスタッシュは神を眼前にして，家族にも洗礼を受けさせたいと言う。キリスト教世界での出家と異教世界でのキリスト教への改宗，この重大事に際して，ユスタッシュは家族と運命を共にすることを選んだが，アレクシスはそうしなかったのである。

さて，この二人の主人公は神に対しても異なった姿勢をとっている。

アレクシスは徹底して禁欲的であり，決して神に不平をもらしたりはしない。新婚初夜，新妻に対してアレクシスが言った言葉は，そのまま彼の揺るぎない信念である。

「アレクシス殿は妻に呼びかけ始めた。彼はこの世でのはかない生を非難し，天上での生活こそ真実なのだと説く。（vv.63－64）」

アレクシスは天上の国を第一の関心事としており，来世での平安を得るためには現世を犠牲にしても構わない。裕福な家に生まれ育ったのに喜捨で身を養い，かつての召使に汚水を浴びせられようとも，我が身を不幸だとは思わない。アレクシスは“天上の大義に殉じるべく現世的な合理性を捨て去る”という意味での Folly of the Cross を貫いている。重要なのはその一貫性である。アレクシスは，信念がもたらす我が身の苦痛も悲惨も“完全に”捨象できてしまう。

一方，ユスタッシュにはそれができない。自分の言葉の危険性に気づきつつも，目下の自分の身の上を嘆かずにはおれない。妻と二人の息子を続けざまに失ったとき，彼は言う。

「お前はヨブのように誘惑を受けるであろう，と，あなた（神）が仰ったことは良く覚えています。でも，私はヨブ以上にひどい誘惑を受けているように思われます。［……］彼には慰めてくれる友達もあったというのに，私は，息子という慰めを奪い去った獣たちの間にたった一人で居るのです。（XV.12－15,XVI.1－4）」（vv.993－1016）

ユスタッシュは決して神や信仰そのものを疑っているわけではない。しかし，苦しい現状を前にしては，神への不平ともとれる嘆きを発せざるを得ない。彼は，アレクシスのような超人的な精神力を持たないのである。とはいうものの，それだけにユスタッシュの方が弱者へよりよく配慮しているのも確かである。アレクシスの殉教はあくまで彼個人の救いだけをもたらす。たしかに，彼の殉教に際しては奇跡が起こり，病人やけが人が回復した。しかし，それはアレクシスが神の恩寵を受けた聖人だということの証ととるべきであろう。彼は自分の殉教に弱者の救済という位置づけを与えてはいない。一方，ユスタッシュは殉教に際して神に次のように言う。

「もし誰かが罪を犯し，お腹立ちになったとしても，その者が私たちの名を呼ばわって祈りを捧げた時には，本当の赦しをお与え下さい。（vv.1947－1950）」（XXXVII,19－23）

ここでユスタッシュは，自分の殉教が一つの可能性を切り開くことをはっきりと述べている。すなわち，“心弱き罪人が救われる可能性”である。むろん，聖人と呼ばれるべき人の殉教ならば，それは前提事項だと言えるかも知れない。だが，ここで大事なのは，心弱き人々に対して，救いの可能性を“語る”か否かということである。物語の全体構成から見た場合でも，アレクシスの殉教では個人的側面が，ユスタッシュの殉教ではある種の集団性や普遍性が強く打ち出されているのは明らかである。

## 第四節　俗語文学の文脈から見たアレクシスとユスタッシュ

最後に，アレクシスとユスタッシュの違いを，他の作品との関わりで考察してみよう。

さて，両主人公の相違のうちの第一のものは家族という概念に関わるものであった。『ユスタッ

シュ』には，『アレクシス』にはない家族の一体感が感じられたのである。こうした一体感の強化は，たとえば，『ギョームの歌』（12世紀半ばに成立）とそのリライト版『アリスカン』（12世紀末頃）の間にも確認することができる。ルイ王に助けを求めにきたギョームを一番冷たくあしらうのは，両作品のいずれにおいても彼の妹，王妃である。しかし，その後の展開はかなり異なっている。『ギョームの歌』では王妃の態度は最後まで変わらない。それに対して，『アリスカン』では，ギョームが怒り狂って妹の首をはねようとするのである。母親がギョームにとりすがってその場を抑え，別室に退いた王妃は娘のアエリスに諌められる。王妃は悔い改め，兄と和解したいと言う。そこで，アエリスはギョームに母親の命ごいをする。姪の言葉に怒りを和らげたギョームは自分の方から妹ブランシュフルールに和解を持ちかける。ひどい侮辱をして悪かったと謝罪するのである。それに対し，彼女の方は「辱められたとも侮られたとも思いますまい。あなたは私のお兄さまではありませんか（vv.3348－3349）[5]」と答える。

ここではギョームもブランシュフルールも理屈よりも情を優先して和解を図っている。すなわち，ギョームが妹に危害を加えようとしたのは，彼女が対異教徒戦の前線で戦う者たちを蔑ろにし，あまつさえ，ギョームの妻ギブールを侮辱したからである。したがって彼の方から謝罪せねばならない理由は何もない。それはひとえに姪アエリスの謝罪の賜物である。とはいえ一方，王妃の殺害を意図したギョームの行為はある意味で反逆罪に相当するであろう。それを王妃の方は所詮兄のしたことだからと不問に処す。『アリスカン』では親―子，兄―妹，叔父―姪といった家族関係が全面に押し出され，エムリー族の一体感が回復されているのである。実際，上の和解の過程では「息子」，「家族」，「娘」などの言葉が繰り返し現れ，この部分だけを取り出すと，バラバラになった家族が再び絆を取り戻していくホームドラマを見るかのようである。

こうした情に訴える家族の一体感は『ギョームの歌』では言及されない。また，この作品と同時代に成立した『ロランの歌』では，ある意味で情が否定されてさえいる。すなわち，サラセン軍勢との和平を批准するため，フランス人の誰かが異教の王マルシルのもとに赴かねばならなくなった時，ロランは義父のガヌロンを指名するのである。むろん，それはロラン自身が立候補して退けられた後であったし，ガヌロンは和平推進を強く主張した人物ではあった。だが，ロランは和平に反対する際に使節に危険が生じ得ることを指摘しているし，またシャルルマーニュは自分にとって大事な人間を使節にやるつもりはないと明言しているのである。とすれば，ロランは義父を失ってはならない重要人物とは見なしていなかったことになる。そしてたとい，それが事実だったとしても，ロランの行動に情が割り込む余地がなかったのは確かであろう。ガヌロンは「私はお前の義父であるぞ」と怒る。だが，『ロランの歌』は情よりも理屈を優先させる人物を英雄＝主人公（héros）としているのである。ガヌロンはマルシルのもとに赴くことになろう。

さて，アレクシスとユスタッシュの違いの第二のものは，神に対する態度に関わっていた。

アレクシスは自分の信念からもたらされる不幸がどのようなものであろうとも意に介さない。

それはたとえば，「君主のためには臣下たる者苦しみに耐え，ひどい暑さも寒さもしのび，彼のためには皮膚でも髪でも失わねばならぬ（vv.1010－1012）[6]」と述べて，ロランが壮絶な戦死＝殉教を遂げるのと似ているし，また，『ルイの載冠』（1135－1165年成立）で「私の若さを王のために費やしたい（v.2674）[7]」と言い切るギョームが，『ニームの輜重』（1135－1165年成立）でも無能にして忘恩の王ルイに仕え続けるのとも似ている。アレクシスが最初から聖人なのと同様，ロランやギョームは最初から最後まで英雄なのである。

それに対して，ユスタッシュにはそうした一枚岩のような頑強さがない。彼は最初から聖人なのではなく，神の顕現を前にして改宗し，神に問いかけ神に教えられて聖人と「なる（devenir）」のである。むろん，物語の冒頭部ですでに神により聖人となる道筋は教えられている。受難の時代が過ぎれば，失われたものは全て取り戻せるし，しかも天上の国に席を得ることができる。神の言葉を全面的に信頼してさえいれば，彼は自分の現状を嘆く必要はない。しかし，それは理屈である。実際，彼は全財産を失っても嘆きはしない。だが，妻を奪われ息子を獣にむさぼり食われた（と信じた）とあれば別である。すでに述べたとおり，ユスタッシュは家族をこのうえなく愛しているのである。とはいえ，皇帝からの使者が視界に入ったとき，彼は言う。

「あの二人の騎士たちに出会うことをお許しになったように，［……］死を迎える前に，港で失ったあなたの婢（妻）に再会することをお許し下さいますように。というのも息子たちの方は，間違いなく命を失ってしまっているのですから。（vv.1142－1150）」（XX.4－8）

ここにはもはや自分の境遇への嘆きは見られない。先の悲嘆はとりかえしの付かない過去の出来事に向かっており，それが信仰のもたらした現状を受入れがたくしていた。だからこそ，神への疑念とまでは言わないまで，神への信頼の不足を印象づける言葉が生じた。ところが今や，ユスタッシュの言葉は未来を志向しており，それは死後への期待をも包含する。すなわち，妻との再会はこの世で果たしたいが――彼女は死んではいないのだから――，息子たちとは来世で再会できれば満足だというのである。ここでは，ユスタッシュは現状を充分に受け入れているばかりでなく，神の配慮と力を完全に信頼している。息子たちが死んだことも，妻と生き別れになったことも神の思し召しであり，受け入れなくてはならないという確信を得ている。何年もの孤独で慎ましやかな生活が，ユスタッシュを“完璧な忠誠を神に誓う僕”へと変貌させたのである。

もちろん，こうしたユスタッシュの変貌を単純に成長と呼ぶわけには行かない。物語を読む限り，彼の変貌の原因は語られないし，また，変貌の過程が段階的に報告されているわけでもないからである。だが，アレクシスの生涯よりもユスタッシュの生涯の方が，成長の物語との親和性が高いのも確かであろう。そうした成長の物語も俗語文学には12世紀末頃でないと現れてこない。1182－83年に成立した『聖杯物語』のペルスヴァルは野生児から騎士に「なる」。そして『アリスカン』の後半で主人公の役割を果たすレヌアールは異教徒からキリスト教徒へと，野生児から

騎士へと二重の成長を遂げる。しかも，レヌアールの方は，２度までもフランスの大義＝キリスト教の大義のために戦うということを疑わねばならない。すなわち，異教徒の王である自分の父親を傷つけ，兄弟を殺した時，そして，戦勝を祝する酒宴に呼ばれなかった時，である。とはいえ，疑念の最中でも，彼は信仰を放棄したりはしない。１度目の疑念の際彼が抛り出すのは愛用の棍棒であり，２度目に投げ捨てようとするのはフランス社会への帰属意識である。たしかに，２度目の時には彼は「我が正当なる主，マホメットにかけて（v.7681）」という言葉を発してはいる。しかし，それはレヌアールが，サラセン人の王になって忘恩のフランス人たちに復讐しようと考えたからである。彼が信仰を投げ捨てていないことは，「お前たちを守ることのできる者は，万人の救い主，神より他にはあるまい（vv.7794－95）」という言葉をギョームとの和解成立以前に発していることから明らかである。ユスタッシュと同様，レヌアールも信仰がもたらす現状に苦しみ，自分の弱さをさらけ出しているに過ぎない。そしてこの巨漢もまた弱者へのいたわりの心を失わない。戦闘が終わった後，サラセン人の残党はソラマメ畑に身を潜める。困った百姓はギョームに何とかしてくれと懇願する。だが，ギョームの返事はつれない。結局，残党を追い払うのはレヌアールなのである。

以上のように見てくると，12世紀前半までの主人公は一貫して大義を確信し，情よりも理屈を優先する強い人物が務めてきたのであるが，12世紀末以降には，理屈よりも情を優先し，大義への強い確信を徐々に獲得していくような「成長する人物」が主役の座を得るようになってきたことが分かる。おそらく，こうした変化は12世紀全般をかけて生じてきたものであり，本論のように年代で区切って変化を整理するのは無理があろう。とはいえ，アレクシスよりもユスタッシュの人物像が後代の主人公のイメージとよりよく合致しているのは間違いない。ところで，両作品ともすでに10世紀には存在したラテン語版を原本としている。それゆえ，その翻訳本に時代差を求めるのは矛盾だとも言えよう。13世紀に成立した『ユスタッシュ』でさえ，比較的忠実に原本を翻訳しているとなれば，なおさらのことである。しかし，ここで問題となっているのはラテン語作品に提示された主人公の２つの類型が，どの時代の俗語作品と親和性を持っていたかということであって，単にどの時代にどのような主人公が好まれたか，ということではない。中世はラテン語と俗語の２言語を併用する時代であり，その２つの言語圏の間には社会的・文化的な階級差が存在し得る。俗語文学の文脈では，アレスシスは早い時代に受け入れられやすい主人公であったし，ユスタッシュは後代に好まれやすい主人公だったのである。

**【註】**

1．「散文版」と「韻文版」の特徴については別の論文で扱う予定である。

2．句送りを最初に用いたのはクレティアンである。ただし，使用頻度は「韻文版」に比べれば非常に低い。なお，「韻文版」の詩法については別の論文で扱う予定である。

3．考察対象テキストは次の通り。

*La Vie de Saint Alexis*, édition de Christopher Storey, Droz, Genève, 1968

*La Vie de Saint Eustache, Poème français du XIII^e^ siècle*, édition d'Holger Petersen, Champion, "C.F.M.A.", 1928

*La Vie de Saint Eustace, Version en prose française du XIII^e^ siècle*, édition de Jessie Murray, Champion, "C.F.M.A.", 1929

散文版は韻文版よりも忠実に原本を訳している。が，当面我々が問題とするのは大まかな物語の展開であり，この点に関しては韻文版も原本に忠実である。

4．散文版からの引用は節番号（ローマ数字）と行数を，韻文版からの引用は詩行番号を付す。また，カギ括弧の外の参照は引用されなかった版の該当個所を示している。

5．*Aliscans*, édition de Claude Régnier, Champion, "C.F.M.A.", 1990

6．*La Chanson de Roland*, édition de Cesare Segre, Droz, "T.L.F.", 1989

7．*Le Couronnement de Louis*, édition d'Ernest Langlois, Champion, "C.F.M.A.", 1984